

國家の風潮故に軍国少年として満州国という國家で育ちましたが、そこは関東軍という日本の軍隊が支配していたようなものでした。満州に入植していた多くの開拓民の方々には、悲惨このうえない民族の悲劇が始まり、避難民として各地をさまよひ多大の犠牲者を出した事実は、それはそれは聞くに耐え難く、その因果がいまだに中国残留孤児の方々の肉親捜しということに現れています。

戦争とは軍隊と軍隊の戦いで、その国の民衆などはほとんど眼中になく、力の論理でいまだに地球上で地域紛争、民族紛争が絶えることなく、「人間は戦争をするものである」という教訓を残すのみで、誠に残念なことです。

嗚呼、こころの故郷撫順の日々よ！

大阪府 佐藤 周

祖国への引揚げ

「おい、早く甲板に上がって来いよ！ 日本に着いたぞ！ 見てみる、綺麗な緑の山と青い海が凄いで、我々はどうとう祖国日本に帰って来たんだ！」。貨物船を改造した引揚げ船「山澄丸」の暗い船倉に、私たちは一週間も閉じ込められる日が続いていた。何かあると集まっては、引揚げ船の船員から教えられた当時日本ではやっていた「リンゴの歌」、中学校の運動部の応援歌、高等学校の寮歌などを、ひそかに持ち込んでいた高粱酒をあふり、狂喜乱舞し、憂さを晴らしていた若い仲間たちは、この絶叫に誘われると急な階段を先を争って駆け上った。そこには中国大陸や遼東・朝鮮半島の見慣れたのとは、全く違った景色が展開され、「おお、遂に日本に帰り着いたんだ！」と感涙に

むせんだ。昭和二十二（一九四七）年七月十五日、長崎県佐世保港南風崎停泊地の穏やかな早朝であった。

だが、なぜか心の片隅で「自分の本当の故郷は一体どこなのか？」という思いが浮かんだことも否定できなかった。

七月早々、十数年間住み慣れた撫順市の貨車操車場から無蓋車に押し込まれ、いまだ残留されているたくさんの日本人や長年の中国の知人たちに、尽きぬ思いで見送られて出発した。班、小、中、大隊に編成された私たち数百人の一団は、同一居住区にいた顔見知りの人たちであった。覚悟はしていたが、渾河鉄橋を渡り短時間走っては長時間停車、昼は白日にさらされ夜は暗闇に閉ざされたままの、いわゆる慢慢的（マンマンデー）で不安な運行に悩まされていた。

先に中国政府最高指導者の蔣介石総統が「以德報怨」の布告を出してはいたけれど、治安不良の鉄道沿線では暴民の襲撃や略奪もあるので、厳重な警戒が必要であった。

そんな状況の下で、わずかな携帯食料で飢えを凌

ぎ、老人・幼児・病弱者をいたわり、排泄処理に難渋しながらも、ようやくたどり着いた目的地の葫蘆島では、日本の引揚者用輸送船の入港が遅れ、不安と焦燥の中でさらに数日間の待機を余儀なくされた。

去る昭和二十年盛夏、父はソ満国境に近い炭鉱に派遣され、私も関東州旅順市に遊学中。留守宅には母と翌日の朝鮮への疎開を控えた妹の二人が、あの歴史的な終戦を迎えたのは、「赤い夕陽と特急アジア」で象徴される満州の「南満州鉄道（株）撫順炭鉱老虎台採炭所・萬達屋社宅」だったが、そこは私たちの第二の故郷であり、墳墓の土地とも思い込んで成長した所であった。

終戦後、中国政府から撫順炭鉱の全日本人従業員に対し、炭鉱設備の維持管理技術を、共に働いていた中国人従業員に完全指導引き継ぎするために、父も同僚たちと約二年間の残留を命じられ、「撫順市日僑俘前後連絡処」の保護観察のもとで、日本人の家族を守るために、民族の誇りを支えに幾多の困難を克服、私たち引揚者一団も全員協力し懸命に生き抜いてきた。そ

の功勞からか前年までの帰国者たちに比べ、一人当たりの日本へ持ち帰れる物品量の制限が緩和され、それに帰国後の生活を考えて衣類・日用品の選択に工夫を凝らした。昔、日本の山野で働いた人たちの経験による用具「背負子せおいこ」を作り、平素の力では考えられないほどたくさん荷物を担いでいる人が多く、私たち親子四人も同様であった。昭和二十二年七月八日、ようやく待望の引揚船に乗船できる日がやってきた。

中国軍の手荷物検査は大変厳しかったが、幸いにも我々グループの検査指揮官は若い女性将校で、相当の教養知識を持ち多少の日本語も理解し、私が旅順高等学校の身分証明書を提示したためか、帰国後の学習用にと行って万年筆・辞書・ノート等の所持を黙認してくれた好意的な処置には心から感謝し、今なお温かく懐かしい思い出として忘れられない。

引揚船「山澄丸」の乗組員に迎えられ、タラップを踏みしめて乗船、風にひらめいて輝く日の丸を見て、日本人としての喜びをかみしめ、出帆のドラを聞きながら、私は心の中でひそかに「さようなら中国と中国

の人々よ！ また来る日まで栄あれ！」と別れを告げたが、戦後の困苦からの恨み言を、罵声を上げて悪態をつく人たちもいた。

佐世保港内停泊地から待望の祖国上陸時、真っ白いDDTの全身散布は、初めての経験で驚いたが、引揚者収容所に落ち着くと、日本に帰れた喜びが再び全身を押し包んだ。

厚生省係官の諸手続きと心温まる扱いには、改めて祖国へ帰ったことを痛感した。

帰郷先別に部屋割りされ、ゆっくりと惜別を語る暇もなく、元気な再出発をと黙視で励まし合うばかりであった。帰郷先への出発待機の数日は雨が降り続き、中国大陸育ちの私は、初めて「アジサイ」がそば降る雨に濡れている姿を見て、「これこそが奥ゆかしい日本の真の美しさだ」と感動した。

終戦後の混乱期に、母の妹夫婦が相次いで発疹チフスで急死、同行引き揚げた三人の幼い遺児を、母が一人で叔父の故郷の徳島県の山間地まで送り届けるために、別行動をとらねばならなかったが、当時の交通事

情から言語に絶する苦勞を重ね、先着していた私たちと熊本県天草郡の郷里で合流できたのは、約半月も後であった。狭い南風崎駅で、ようやく私たち三人が乗り込めた列車も復員軍人・食糧の買い出し人・引揚者で超満員に混雑し、戦後の祖国日本の想像を超えた混乱に驚き、時間をかけて何とか出身地へ帰り着くことができた。

故郷・天草へ

何とか引き揚げた郷里では、既に父の数人の兄弟たちが疎開・復員・引揚げで生家にひしめいており、割り込む余地はほとんどなく、村役場の斡旋で村営の伝染病患者緊急隔離所跡を住居に指定され入居したが、そこは薄暗い裸電灯がついているだけの小部屋で、いかに引揚者で所持品が少ないとはいえ実に狭かった。また、引揚者に支給された見舞金的な一人当たり千円の援護金は、当時の食糧難に加え、ちょうどお盆の時期と重なり、親類内に戦争の犠牲で亡くなった人も多く、この供養参りに父母の気苦勞は大変だったことだらうと思われる。

故郷は昔、漢詩人「頼山陽」が七言絶句で嘆賞朗詠した「天草灘」の絶景に面してはいるものの、戦前から特筆するような産業もなく、収入源を外部に求めざるを得ず、進取の気性に富んで海外に雄飛した人も多しと言われたが、その実情は自営・自活できるほど豊かな島々ではなかった。

付近の地理に詳しい父の指示で、私たちは海辺で魚・カキ・海藻などを採取、農家に頼んで買い求めたかんぼや野菜類と、少しの米粒を加えた天草雑炊に舌鼓を打ち、飢えを凌いだ日々が続いたのが今も懐かしい。

生い立ち

熊本県天草郡志柿村（現本渡市）の海辺の小さな家で、父・喜義と母・タケ（当時・共に二十一歳）の長男として昭和二年六月十二日に生まれた私は、「周（いたる）」と命名された。姓がありふれて平凡なので、この名には大きな誇りと深い親しみを持っているが、正しく呼ばれたことはほとんどなく、「しゅう」と呼ばれることが多かった。

父は十一歳で祖父（当時五十二歳）と死別し、六人弟妹の長男として祖母（四十歳）に協力しながら尋常高等小学校を卒業すると、生活の糧を得るため球磨川電灯（株）天草配電支所（現在は九州電力（株）に合併）に就職した。

まだ交通手段も不便な時代に、天草郡内の各村落の変電所を転属しながら、弟妹の成長教育・就職・結婚に力を注いだ。このような家庭の状況もあり、父自身も転属地で母との良縁を得て若くして結婚した。大正末期から昭和初期には、世界的な不況から日本国内も不景気風が各地を襲い、労働者の意識の向上と共に労働争議も発生、思想問題も暗い影を呼び込み、エログロナンセンス時代が進行していた。生来、剛気で血気盛んな父は、結婚して間もないのに正義感と大家族主義の経済的逼迫など、主に福利厚生面のことで当時の上司と意見の相違から会社を退職した。不景気な世相は一段と深刻化、軍部の台頭・独走と共に社会不安も増加した。この時節に再就職に奔走するのは大変だったようだが、幸いにも父は長崎市の電気関係の会社に

職を得て母を同伴赴任した。歳月の流れと共に微妙な社会変化もあってか、父は以前に勤めていた会社から要望され、円満に復職して郷里の天草に帰った。

現役軍務服務中に私が誕生、四年後に母の郷里の天草郡一町田村で妹が生まれ兄妹は二人となり、美しい山村の良い環境の中で育てられた。母の長兄・松尾栄勝伯父は昭和初期から撫順炭鉱に勤め、次々と親類縁者にも渡満を推奨された。当時の国際諸問題の紛糾と不穏な暗い情勢に、日本でも軍備拡張を目指す国策が一段と強化、郷里天草の生活の窮迫ぶりを遠く外地から見ていた松尾伯父から、さらに強く渡満を勧められた父が情勢を熟慮し希望、夢を抱いて単身渡満したのは、昭和八年十月の秋であった。

新天地・撫順へ

翌九年春、私は天草郡本渡小学校に入学、新国語読本「サイタ サイタ サクラガ サイタ」を読み慣れ、一学期が終わって八月の夏休みになると、母に連れられて祖母、私、妹は生まれて初めて天草の地を離れ、父が先に渡航している撫順市に向かって出発し

た。

熊本を経て門司、下関、目にする風物はすべて珍しく、関釜連絡船の大きさに驚き、天草灘とは違う対馬海峡の荒波に目を見張り、船酔いする暇もなく釜山港に到着した。

途中から、京城（現ソウル）で働いていた父の次妹が乗り込んで、未知の地へ向かった。

沿線は茶色っぽい丘陵が続き、優雅にシラサギが舞っているのが珍しかった。新義州シンギョウから鴨緑江を渡った満州の安東駅アントウでは、松尾伯父が私たちを迎えてくれた。

昭和六年九月十八日に満州事変が発生、翌年三月一日に日本は満州国の建国を宣言、九月十五日に日滿議定書が調印された。この十五日、「遼東民衆自衛抗日軍」と称する匪賊が撫順炭鉱を襲撃、多くの日本人を殺傷し設備が損壊された。翌十六日、関東軍守衛隊が報復行動をとり、平頂山という中国人部落を匪賊隠匿の疑いで徹底調査をするとして、部落民全員を一カ所に集めて銃殺、遺体は焼却して近くの丘に埋め極秘処

理したという惨劇で有名な「平頂山事件」が起き、周辺の治安は悪化していた、

やがて到着した撫順市の地名は、明の時代・洪武十七年（一三八四年）に、「撫綏辺疆、順導夷民（辺疆を撫綏し、夷民を順導す）」に由来すると言われる。

世界有数の炭都で、その鉱区は東西四十六キロメートル、南北四キロメートル、面積一千八百二十万坪、埋蔵量は約十億トンで、炭層の厚さは平均四十三メートル、採炭は坑内掘と露天掘に分かれているが、最大の露天掘りの規模の広大なことはまさに世界第一を誇っていた。なお、炭層の上を覆う無尽蔵の油母頁岩は、日本の重油供給上重大な資源で、撫順独特の発明による乾溜重油を採り、副産物としてパラフィン、硫安などを精製、アルミニウムなど軽金属も製造、その他各種の工場群が林立した東洋屈指の工業都市であった。当時の人口は約二十万人（日本人は二万余人）で、満州としては珍しく起伏に富み樹木も多く、西洋の田園住宅のような立派な日本人の炭鉱従業員社宅、商店街が東西を中心に展開し、市内の大半の道路はア

スファルト舗装、パンタグラフをつけた市内・郊外電車、馬車、人力車、乗合自動車が走っており、素晴らしい近代都市であった。

暮らしやすさと安全は別で、中国人に囲まれた私たち日本人の住宅街は二重、三重に防護され、鉄条網に電流が流されていたのは、匪賊の襲撃などから守るためであった。

昭和九年夏、与えられた撫順炭鉱・萬達屋の社宅に家族一同が落ち着き、九月上旬に郊外電車で一駅隣接地の「新屯小学校」に私は一年生二期から転入学した。校門を入ると奉安庫があり、立派な洋館風の校舎にはラジエーターや水洗トイレ、プールも備えられ、周囲は濃い緑に囲まれた豊かな環境の中にあり、至れり尽くせりだった。

篠原校長、須山先生は優しい方で、美しい校歌もすぐに覚えられた。

転校当時はやはり悪童が数人いて、田舎言葉や野暮臭い服装には、随分といじめられ意地悪されたが、それも今では懐かしいひとこまである。

昭和十一年の三年生から六年卒業まで河合先生が担任、厳格ながら温情あふれる教育熱心な方で、一人の非を正すにも学級全員を論し、全員に鉄拳が飛んだしつけの誠が忘れられない。人格・個性の平等評価、民族的偏見を排することを信条とし、決して現地中国人をも蔑視していじめないようにとの指導を続けられた。

学校の裏手には小高い清泉寺山、少し離れて広い池を抱えた新屯公園があり、毎年夏にはキャンプや試肝会を楽しんだ。冬は校庭に散水すると凍ってスケートリンクになり、スピード競争、アイスホッケー、フィギュアスケートに熱中し、アイスホッケーでは市内の日本人小学校六校の対抗試合で優勝を飾った。六年生の卒業記念の秋の行事に、撫順・奉天（瀋陽）市間の約五十五キロメートルを徒歩踏破するため、一年前から徒歩通学、毎月一回十数キロメートルの歩行遠足などを計画的に続け、根気の要る訓練は人生の大きな修煉として忘れられない。

満州国も次第に基礎が固まり、三千万の人々の平和

な生活も安定し、「民族協和の王道楽土」の建設という興国の大目標から、全満州地区で「協和青少年団」を結成、各民族・各学校代表が新京（長春）に集まり、数日間の起居を共にしての結団式・個別団旗授与式に、新屯小学校代表で参加し大変感銘を受けた。

修学旅行は奉天市郊外の北陵に始まり、一年毎に平壤・京城・仁川、大連・旅順へと距離が延長された思ひ出は尽きないが、最終の日本旅行は時節柄ついに実現されなかった。

苦難の中・高校生活

昭和十五年春、私は新屯小学校を卒業し撫順中学校に進学した。当時の中学校は市街地の鳥の絡まった洋風校舎だった。近くに撫順炭鉱本部事務所があり、翌年夏頃に市内のほぼ中央の久保町に移転、旧校舎は撫順炭鉱総合研究所となった。

入学当時の校長は福島先生、担任は井上先生で、重厚な風格の方々で、国内外の情勢緊迫もあって学習内容の変化のみならず、入学式当日から各組毎に五年生の指導者が決められ、早速に厳しい「しつけ教育」が

始められたのには驚いた。

新校舎は、近くにボート池と蓮池があり、外観はグレーにまとめられた二階建てで、校庭も随分広く落ち着いた雰囲気を漂わせていた。

関東軍からの配属将校による厳しい軍事教練、寒中軍行進演習、片道十五、六キロメートル離れた山まで行軍し、毎春恒例の松苗木を植樹する作業、全校生が勢力となつてのウサギ狩り、スポーツが盛んだったため、応援歌の猛練習によるしごきなど、次々と新しい行事に面食らいながらも中学生になったことを自覚した。

昭和六年に創設のラグビー部は、私達の入学前が全盛期で、昭和十二年から十五年までは、毎年正月に兵庫県南甲子園運動場で行われる全日本中等学校ラグビー大会に、満州地区代表で四年連続出場、昭和十四年、五年と全国二連覇を達成した。

一緒に渡満したのにどうしても気候風土に馴染めず、三年前から天草に帰郷し静養中の祖母が、昭和十七年四月に六十六歳で病没、家族揃って八年ぶりに葬

儀に帰郷した。

日本国内は「挙国一致・大政翼賛・贅沢は敵だ！」というようなスローガンの看板が並んでおり、すっかり戦時色になっているのには驚かされた。私は同年の後半に体調を崩して休学養生し、三年生を留年した。

翌年から二年間担当の菅沼先生は物理学専門の理論派で、厳しいが温かい指導を受けた。先生は内心ひそかに反戦平和主義を堅持しておられたが、私たちを四年終了で卒業させると応召、戦後シベリアに数年間抑留され大変なご苦勞をされた。菅沼先生と小学校の河合先生は、私の青少年時代の人間形成に大きな影響を与えていただいた恩師であり、今なお深く追慕してご冥福を祈念している。

次第に戦局も厳しく急変、昭和十八年になると満州輕金屬（株）に断続的ながら約二年間勤務動員され、十九年の盛夏の一カ月間、松花江下流の佳木斯^{ジャムス}周辺の移民開拓団へも動員派遣された。その頃、日本では十月二十一日に神宮外苑で先輩学徒の出陣式雨中行進が行われた。学友の教人も陸海空の少年兵、予科練、海

兵団に応募入隊、昭和十九年から二十年になると共に、日本の陸軍士官学校、海軍兵学校をはじめ満州国軍官学校へ進学する者も次第に増加した。

昭和十九年三月、採炭量の大増産のため、連日の残業、夜勤に追われ、運搬トラック用の電気牽引車も過重使用から次々と故障し、電気班長の父も連夜の修理で過勞、作業中に高圧電力接触の重傷で倒れ、撫順炭鉱病院に約三カ月間入院治療した。

縁とは全く不思議なもので、父はその入院中に、天草の配電支所に勤めていた頃、大変世話になった人と同姓の余宮（よみや）節子という女性に出会い、確認したところその人の孫と分かった。その後はその友人たちも連れて来宅すると、私たちが家族は皆で身内のようにもてなした。

昭和二十年になると日本の上級学校受験はほとんど不可能で、菅沼先生のご指導で私は旅順高等学校、満州医大予科、満州国立の医大などに合格できた。医学への道を希望していた私は、諸先生や家族と相談の結果、昭和十五年・紀元二千六百年を祝し、関東州旅順

市に創立された外地最後の旧制高校である旅順高等学

校の理科乙類（六回生）に大きな希望を抱いて入学書類を提出した。だが、戦局の激化による諸般の状況から四月の入学はしばらく延期、その間「上級学校進学者勤奉隊」として再び満州軽金属（株）に動員され、正式には七月一日に入学・入寮したが、専門授業の時間よりも軍事教練と防空壕掘削作業の強化に追われる日が多かった。七月末に撫順市出身者は撫順炭鉱上層部に作業器具、関連諸資材の分与を依頼説得することと、自宅に所蔵する武器類の持参を学校から命じられて帰撫し、生徒課長の来訪支援もあり、何とか発送した調達物品は八月七日に旅順に到着した。

灯火管制の下で寮歌『北帰行』を絶叫高吟して、鬱々たる青春のストームを繰り返すうちに、八月六日・九日の米軍の原子爆弾投下に九日未明のソ連軍の突然のソ満国境侵攻が重なり、在学中の私達旅高中生全員にも、十五日の夕方には旅順要塞司令部管轄下の陸軍部隊に入隊せよとの大動員令が下された。

終戦後の日々

八月十五日の昼食が送別会になる予定だったが、奇しくもポツダム宣言を受諾する「終戦の詔勅」の放送で、そこは慟哭・狂乱・混沌・別離の場に急変、行元豊円校長の訓示の後、旅順高等学校の閉鎖解散式となり、以後どのように対処すべきか右往左往……。酷暑の中で、激しいせみ時雨が聞こえていたことが忘れられない。

幸いにも、父上がまだ要塞司令部の要職にあった級友に、十六日昼、何とか撫順までの列車切符を入手してもらい、残っていた寮生達と別離の絶叫乱舞しながらも荷造り発送し、十七日の早朝、撫順出身の学友たちと、短期間ながら過ごした校舎・寮に名残を惜しみながら旅順を出発した。駅員から列車遅延を予告されたとおり運転は全く不規則で、ようやく撫順の自宅にたどり着いたのは十八日の夕方、送った荷物は戦後の混乱で遂に到着しなかった。

北辺のソ満国境に近い光義炭鉱に派遣されていた父も、二十日の朝方にソ連軍の侵攻空襲をかくぐって

ようやく帰宅し、数カ月ぶりに家族四人全員が揃って安堵した。

昭和八年、撫順炭鉱に就職した父は、典型的な明治生まれの熊本人（肥後もっこす）の特性を持ち、短気豪放で直情径行、清廉潔白な性格ながら交遊も広く、電気班長として数十人の中国人の部下を任されていたが、彼らの私的贈与、接待は全て拒み、誠意には必ず礼を返す温情と理非曲直をもって指導したので、よく信頼され慕われていた。同郷の母も内向的性情ながら、父の性格と方針を良く知って、中国人の部下と家族には対等に接し、私、妹の着れなくなった衣類などは、日頃から洗濯・アイロンをかけて、彼らが来た時には食事を共にし、これを手みやげに渡していた。

終戦後、日本人が一般中国人に迫害・排斥され、非常な食糧入手難に陥った時に、義理堅い彼らが暗闇に紛れてひそかに食糧を持参してくれたのには大変有り難く感謝した。

昭和二十年八月二十八日にはソ連軍が進駐して来るというので、事前に自決用の青酸カリも支給された。

私たちは進駐兵の婦女暴行を恐れ、母・妹をはじめ、三日前に撫順炭鉱病院から避難してきていた余宮節子さん、田辺チエさん、また全住宅の女性達も坊主頭で男装し屋根裏に避難した。男性たちは自警団を組織しながらも、各家毎に赤旗を揚げ道路に出て歓迎した。彼らは住宅内には入らず採炭事務所や社員クラブなどに分駐した。

どの国の進駐占領軍も決死的だろうが、シベリアの流刑者上がりが多かった彼らは、マンドリンと呼ばれる自動小銃を、時と場所や相手の国籍を問わず構え、「ダワイ！ ダワイ！」と腕時計、万年筆などの金品を略奪したり、酒食や女性の要求、脅迫をした。

地元暴民の略奪は、屈強な若者たちが先頭に立つて群衆が乱入し、女子供までも加わって持てるものは全部持ち去り、ソ連軍が鎮圧に來ても反って一緒に暴れて混乱し、略奪は連鎖反応して堰を切ったように暴動となる。隣接の日本人社宅街は破滅的な被害を受け、幸いに私たちの居住社宅は難を逃れたが、たくさんの罹災者を分散的に引き受けて援助した。

ソ連軍は赤い軍票を猛乱発しながら、強制採掘させた石炭、発電所ほかの重要設備を撤去し、貨車に満載して自国に持ち去り、日本・中国人たちは連日連夜労働を強制された。

日々の生活維持と無職者としてソ連軍にシベリアへ強制連行されるのを避けるために、十月上旬に私も採炭所庶務課に臨時雇用されたが、幸いにも日本人の徳永課長と中国人の常守業（チャンススイエ）課長の並任で、日本語が堪能な常課長には公私にわたり大変厚遇してもらった。

北辺のソ満国境近くにいた満鉄、民間人、開拓団の二千二百余人の人たちが生死をさまざま苦勞をして、避難民として到着、社宅や学校、事務所に分散収容された。比較的落ち着いた撫順という地区でたくさんの方を避難民を迎え入れ、少しでもお世話できた私たちは本当に幸運であったことを今なお感謝している。

当時は、私たちでも高粱をビール瓶に入れて細い小棒で搗いて白くし、ジャガイモや野菜の煮物しか食べられないような食糧不足と環境不良のため、やりくり

したわずかな食糧や使用できると思われる衣料の供出に専念した。たくさんの方の難民たちが発疹チフスなどの疫病で亡くなったが、酷寒の季節柄で遺体は山あいに杭木のように積み上げられ、春を迎えて一緒に茶毘に付される光景を見て、戦争の悲劇な残像がまぶたに強く焼き付けられ、今なお消え去ることなく、平和の尊さを痛感している。

小学校五年生から中学校卒業まで教えられた中国語は、社宅周辺の中国人の子供たちとも昔から仲良く遊んでいたせいか、戦後も彼らと意思が通じ合えて好意的な交流ができたが、一般の中国人の中には敵対視する者も多く、売り食いのために衣類や家財を少しずつ持ち出して、撫順市内で処分するときにトラブルが生じることもあった。

一方、ソ連軍進駐下のまま、日本人戦犯摘発の噂が飛び交い、広場に一般民衆を集めての人民工作隊工会の公開人民裁判が頻繁に行われ、異常な雰囲気の中で大衆の判決により、処刑は即時その場で執行され、日本人には弁護、討議参加の資格も与えられずに、中

国人の告発や密告による疑惑の難を避けて身を隠す方も多く、後年、撫順戦犯管理所が設けられ、平頂山事件当時の撫順炭鉱の久保元炭鉱長が、その責任を負って戦犯として処刑を受けられたことは誠に残念で、戦争がもたらす悲運、悲惨なことながら、心から哀悼の意を表しご冥福をお祈り申し上げたい。

ソ連軍が撤退すると、中国の国共両軍の進駐、撤退が繰り返され、その都度の指令・軍規などもまぢまぢで、慰安クラブの設営の強要もあり、日本人幹部はその対応に日々苦慮腐心され、私たちは「日僑俘」として取り扱われ、自分の思想・主義を表明するのは一段と危険になり、その時々々の中国当局の指示に従い、ひたすらに日本帰国が指示されるのを待ち続け、遂に昭和二十二年五月になって、翌六月中旬以降の留用解除、引揚命令が出され帰国準備に取りかかったが、後に残留する人たちもあり、万感交々の毎日だった。

引揚地・天草から大阪へ

昭和二十二年盛夏、郷里の天草に引き揚げ、撫順炭鉱で責任ある職責を務めた父としては意を満たす就職

先もなく、私も高等学校への転学希望で落ち着かず、戦前から大阪に在住の母の姉・京兼春代のご主人が、戦後復興を目指す大阪市港湾局に在職しておられたので、父はその電気技士として就職でき、秋には家族揃って新天地を求めて上阪した。

大阪市から借りた市有地は、大爆撃の瓦礫に覆われた焼け野原で、近くには仮設の木造平屋建ての大阪市営住宅が並んでいたが、レンガを積んだ基礎はセメントや留めボルトもなく、屋根は薄皮板張りの我が家は、ようやく親子四人が雨露を凌げるバラックであった。父は港湾局に勤め、母は家で配給のメリケン粉とうどん・パンの交換店を始め、妹は女学校への転入を諦め父と共に就職した。

学園生活への復帰

昭和二十三年春、私は思いやり溢れたテストを受けて旧制最後の大阪高等学校文科甲類（二十七回生）に、心を弾ませて転入学した。担任は英語学の住田先生。

先に引き揚げた先輩・同級生が好成績で頑張ってお

り、日本育英会奨学資金や授業料免除を受けることもできて大変有り難かった。寮には外地学校の旅順高・台北高・京城大予科他の転入学生も多く、刻みたばこの回しのみ、鯨テキや薄い味噌汁、フスマのたくさん入った固いパン食などの恨みからか、寮生劇として演じた『飯』は忘れられない。戦後の平和思想を基にした高校教育授業、「唯物史観」による日本史、防人の歌としての万葉集の講義に目を開かれた。民主主義を標榜しての社会・共産主義の論調が校内を揺さぶり、暴力革命を肯定する過激な言動に走る学友もいた。学費と生活両立の収入源が必要だった私は、先に転入学していた外地引揚げの寮生たちが、幸いにも心斎橋商店街から好意的に委託され夜警組織を作っていたので、一週間に数回は旅高寮歌「北帰行」を歌いながら深夜の街に拍子木の音を響かせて巡回した。今もこの仲間が「大高拍子木会」として時々集まって旧交を温めている。

翌昭和二十四年には学制改革で、私たちは新制度大学の第一期生となるので、旧制の大阪、浪速高等学校

が発展的に統合され、教養学部、法文経学部として設立される大阪大学・法学部を受験、合格して進学した。

学生時代に特に忘れられないのが風水害と、高潮被害との長年の戦いである。昭和二十五年九月三日夜のジェーン台風では防潮堤が崩れて家の周囲はほとんど浸水・停電・断水し、住民は屋根の上に避難した。その夜は夜警のアルバイトで御堂筋にある小屋で吹き荒れる雨風に驚かされながら寮友と二人で不安な夜を過ごした。我が家も流されてしまい、引揚げ以来三年間家族で築き上げたものは文字どおり水泡に帰した。

我が家を建て直して再び新生活の確立を目指す事になったが、公的な支援補償もなく、一家総力を挙げての再建のため、昼夜を分かたぬ経済力の強化に努め、私もそれまで以上に大阪港内の堤防用投石作業、選挙運動員、食糧買い出し手伝いなどのアルバイトに精を出さざるを得なかった。

社会人としての歩み

大学の講義とアルバイトの狭間に揺れているうちに

卒業の日が迫ったが、朝鮮動乱の政治的、経済的狂乱後の就職は企業の買い手市場となった。数社の大手企業を受験したが、既往症の痕跡で合格できず、昭和二十八年に中小の鉄鋼問屋に入社、翌二十九年秋に天草の親せきが仲人で、前述の余宮節子と結婚した。

昭和三十年に鉄鋼総合商社「東通(株)」に転職、その広島出張所開設から支店昇格まで十年間勤めて三十九年大阪に転動したが、同社が大手特殊鉄鋼メーカーの倒産の影響を受け蹉跌、四十一年に総合商社「丸紅(株)」に吸収合併されて鉄鋼部門に配属、四十二から四十七年まで高松支店勤務、四十八から五十六年まで関連事業部付けで(株)名古屋珪鉄鋼板センターに役員として出向、その間は単身赴任でもあり、丸紅(株)指定の通信教育「経営指導者・商工業部門講座」を二年間受講して文部大臣賞を受賞、五十七年に新日本製鐵(株)・丸紅(株)合資の電気資材加工の兄弟会社であった、大阪金属加工(株)に同職で転出向、同年九月丸紅(株)を定年退職した。その後も六十三年まで同社に役員のまま勤続、同年六月に他の

関係会社に転社後数社を経て、平成十年の三月に第一線から完全に退職した。

現在の安らぎ

父は昭和六十一年四月に八十一歳で天寿を全うし、母は九十四歳で元気に私たち夫婦と同居、二人の息子は共に丸紅(株)鉄鋼部門関係会社に入社、それぞれ二子を得て頑張っている。

余暇ができ、老後の趣味に木版画教室と中国語の再学習に、毎週二回通っている。現職を去り年齢を重ねると共に、小・中学校の同窓会が毎年全国的に行われ、特に旧制の高校・大学予科などの「全国寮歌祭」は東京・大阪を中心に各地で盛大に開催され、毎年一度は集まって青春のストームのように肩を組んで絶叫・高吟・乱舞している。

高校・大学の同窓会や満州時代の多岐多彩な知人・学友・幼友も多く、その一人が数年前の撫順市訪問時の通訳女史と親交を続けていると、再訪問を招請されたので平成八年春に同人と私たち夫婦・知人の一行六人で大連・瀋陽・撫順を一週間にわたり訪問し、終戦

後の勤務先で大変お世話になった中国人の常課長が健在だったので、再会し懐かしく歓談した。

一行は平頂山殉難同胞遺骨館・記念碑に赴き、連名の花輪を捧げ平和を祈った。

その通訳女史とは私も文通親交中に、撫順訪問時に面談した通訳の令嬢の日本留学希望の斡旋要請を受け、私が会員である(社)国際善隣協会の国際善隣学院に推薦入学、平成十二年春に優秀な成績で卒業し、東京外大言語情報学部へ進学しているが、四月からはその従弟が後に続いて同学院に入学した。私たちが婦愁を込めて思い出している撫順も、満州国時代は在来中国人の真情は複雑なものであったと思うが、その地こそは私たちが長い間育んでくれた故郷である。現在ささやかに、個人外向的にやっている中国人子弟への協力も、終戦後の私たちへの温かい処遇や、民族の恩讎を超えて残留日本人孤児の方々に寄せてくれた、中国の人々の好意に対する日中友好の心ばかりのお礼だと思っ

ている。
顧みれば、波乱万丈の昭和を経て平成の時代まで、

よくぞ生き抜いてきたものだと思うし、これからも軍事的な手段による一刃両断式な事態解決をはからず、紛糾の收拾解決は政治的・外向的な手段に頼り、決して戦争をしてはならないと念じている。

今もなお撫順の地が忘れられず、もし健康的に許されるならば、家内と共にもう一度必ず訪れて、旧友や古老と回顧談を交わす歓びの幸運が得られれば幸いである。

一度は逆境に落ちながらどうか這い上がれたことが、私たちの大きな活力の源泉になっていることを忘却できないと思いつながら、筆を置かせていただきました。